

[第 11 回国際川崎病シンポジウム](#)において エコチル調査による川崎病の大規模出生コホート研究について発表を行いました

横浜市立大学大学院 医学研究科発生成育小児医療学 主任教授
(独) 国立成育医療研究センター 腎臓科 非常勤医師
エコチル調査メディカルサポートセンター 二次調査検討プロジェクトメンバー
伊藤秀一

2015年2月3日～2月6日に米国で開催された[第 11 回国際川崎病シンポジウム](#)で、「川崎病の大規模出生コホート研究について」のポスター発表を行いました。川崎病は1967年に小児科医の川崎富作先生が、手足の指先から皮膚がむける症状を伴う小児の「急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」として、世界で初めて新しい病気として報告しました。その後、川崎富作先生の名前をとって川崎病という病名になりました。川崎病は全身の小さな動脈に血管炎という炎症を起こします。特に、心臓の筋肉を養っている冠状動脈(冠動脈)に炎症が起きると、重症の場合には血管壁が破壊され動脈瘤を作り、心筋梗塞や突然死の原因となる場合があります。川崎病は日本人を含めアジア人に多く発症することが知られていますが、原因は今なお明らかにされていません。昨年も1万4千人という過去最高の患者数を記録し、さらに年々患者数が増加しています。エコチル調査では質問票から子どもたちの川崎病発症の状況を把握するだけではなく、二次調査として発症したお子さんを対象により詳しい情報を収集しています。多くの参加者からエコチル調査が川崎病の原因解明につながるのではないかという、期待をいただきました。国際的にも例のない大規模な調査に世界各国から集まった研究者からの高い関心を集めました。

